



天皇杯に輝く銘茶

そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

13. 製茶の機械化促進と、 お茶販売の共同化に尽くした島津良知(1)

県茶業試験場茶業指導所は、製茶技術の改良を進めるため機械の導入を図ったが、資金の調達と茶の販売組織の近代化について壁に突き当たったのである。当時代は、明治維新の初期に当り、300年近くの幕政によって、農村は乏しいながらも平穏な生活が続けられてきた。嘉永6年(1853)6月3日、アメリカ合衆国ペリーの浦賀来航により日本は開国し、英・露・仏など西欧諸国との貿易も始まり、我が国は文明開化の激流の中で264年間続いた徳川幕府が大政奉還し、慶応4年(1868)明治元年と改元され、これまでの制度はすべてと謂われるほど改正された。この時代に多くの人材が新日本の建設のために学を修め業を習い、それぞれの分野で活躍した。

新政府は、明治5年8月3日学制を公布して「自今以後、一般の人民華士族、農工商及婦女子必ず^{むら}邑に不学の戸なく、家に不学の人無からしめんことを期す」とその壮大な所信を表明し、近代国家にふさわしい新制度が施行された。

先ず小学校が創立されることになり、同時期に初等教育の第一線に立つべき小学教師の養成は緊急な課題であった。長崎県(当時は現在の佐賀県までの範囲)では明治6年(1873)向明学校(長崎市勝山町)に長崎教員仮師範所が設置された。その後幾度か名称が変更されたが、明治9年(1876)に長崎公立師範学校と改称され、以後に設ける師範教育の前身となった。

当時彼杵村の前途を思う多くの人達の中に島津良知がいた。島津良知は安政5年(1858)8月8日島津彦兵衛の長子として坂本郷に出生し、明治7年長崎教員養成所に入学し教師の道を選び勉学に励んだ。

当時の長崎教員養成所の入学競争率は30倍とも謂われた。学費は各人に月額8円を



明治36年、衆議院議員に当選した頃の島津良知

官給し卒業時の成績順に初任給が決められた。先ず1番から5番まで月額30円の給与、10番以下は月額12円と格段の違いであった。師範学校卒業でない助教のそれは、10円から4円までであったので、いかに勉学競争が厳しかったか窺われるところである。島津学生は入学前、蔵本の私塾塾長満井俊八郎、助教佐藤安次郎（いずれも後の新制彼杵小学校長）について学習、昼夜を分かたず勉学に励んだ。朝7時に自宅を出て6kmの道を走り歩み、8時の蔵本塾の始業に駆け付けその日の学習を深夜まで復習し、さらに明日の予習を終えるほどの勉学を続けた。30倍の入学競争に勝てる学習はこれを支える母の尽力もまた大きかった。こうして難関を突破した島津良知を迎えた長崎師範教習所は全寮制で日常生活の規律が厳しく青年期の島津良知は節度ある生活を習得したのであった。

明治10年6月1日創立開校した音琴小学校は島津^{くんどう}訓導を校長として迎え校区一同勇躍してその活動を期待しあらゆる協力を惜しまなかった。音琴小学校区は年長の児童の入学希望が多く、20人の定員に30人が入学した。

鎖国270余年我が国唯一の外国に開かれた港町として発展してきた長崎で学び、さらに維新の開国によって西欧諸国の文明文化が波濤のごとく流入してくる長崎の変動を体験した青年教師島津良知の気概はいよいよ高まり、新しさを追求する児童の熱気は常に教壇に充ち溢れんばかりであった。

音琴戸長南仁兵衛（北海道帝国大学総長南鷹次郎農学博士の父）先ず通学路の整備をはじめ校舎の修復につとめた。

しかし教育費の負担が高く初期には校区全戸に年平等割であり児童の月謝は50銭であった。（明治12年の地租改正調査の出役日当は^{ひらふ}平夫で10銭）米価1俵（60kg換算、2円64銭）この時代の教育費を負担することが難しい家庭が多く、小学生の退学が多く20人の入学児童が3ヶ年修学して卒業したのは8人であった。

この現実を体験した島津教師は、管轄官庁の長崎県に直訴すべく、東彼杵郡内4ヶ浦（宮津・川棚・音琴・千綿）を立ち上げ教師と父兄一体となって教育費の軽減と就学児童数の向上を訴えたが、数度の直訴にもかかわらず軽減よりむしろ増額の方向に動く実態であった。そこで島津教師は県議会に出て初志を実現すべく、明治18年4月県議に出馬し当選した。時に27才であった。県議会の所管はあまりにも広くやはり地域の産業発展こそ教育の充実につながると考え、明治22年4月彼杵村村長に就任した（31歳）。

（次回は2月号）

資料 『明治大正農政経済名著集4』

『長崎県教育史』

『東彼杵町誌水と緑と道』 『長崎県編農事調査』

【平成24年12月15日発行】